

本書はジヨウゼフ・コンラッド (1857-1924) の中短編小説『The Shadow-Line: a confession』及び『The Secret Sharer: an episode from the coast』の全訳である。

コンラッドは在世中、文章の豊かさ、海上や異国の土地における危険に満ちた生活の描写によつて賞賛を博した。当初の彼の名声は海にまつわる多彩な物語の名手としてのものだったが、そこに隠されていた彼の真の関心事は、常に人間に対し無関心かつ無慈悲な自然と対峙したときの個人のありよう、絶えることのない人間の悪意、善と悪にはさまれた人間の心の内なる戦いであった。複雑・多面的な技巧と際立つた洞察力、そしてなによりも、きわめて独特な想像力を具えた作家として、彼は英国の最も優れた小説家の一人と見なされている。

ポーランドに生まれたコンラッド (本名ヨーゼフ・テオドル・コンラート・ナウエンチュ・コジェニョフスキ) の思想の骨格を形成したのは、幼少時代におけ

かうことを許した。コンラッドは十二月マルセイユで伯父の知人の所有する船に乗ったのを皮切りに、以後約三年半フランス商船隊の一員として過ごした。成年に達すればフランスの徴兵の対象となるため、コンラッドは一八七八年四月イスタンブールに向かう英国の貨物船に甲板員として雇われ乗船した。この船で六月英国のローストフトに上陸し、初めて英国の土を踏んだ。

その後約一六年間コンラッドは英国の商船隊に身を置くことになる。二〇年間近い船乗りとしての生活、特に英国商船時代の航海は後年の数々の作品の背景となると同時に、彼の言葉によれば、「我が人格の根底的部分を形成した時期」であった。

一八八〇年彼は二等航海士の試験に合格し、一八八一年九月に石炭を積んでバンコクに向かう老朽帆船パレストライン号に乗り組んだ。この航海で彼は初めて東南アジアを目にしたのであるが、航海は絶え間ない困難に見舞われた。特にやつとマレー群島に到達したとき、積荷の石炭がジャワ沖で発火し、コンラッドは他の乗組員と共にボートで二三時間半漂流した後、ようやくスマトラに近い島に流れ着いた。これが東洋の土を踏んだ最初であった。コンラッドはこの時の経験に

る祖国の政治的混乱と、とりわけロシアの支配下にあつて国家主義者として活動した父親の苦闘の記憶であった。父親アポロ・コジェニョフスキは詩人であり熱烈な愛国者で、ポーランド独立運動の急進派と交わり、その中心人物の一人となった。彼は一八六一年十月にロシア官憲に逮捕され、六か月の裁判の後、北部ロシアの酷寒の地ヴォログダに流刑に処せられた。四歳のコンラッドと母親はアポロに同行したが、流刑地の過酷な気候により生来蒲柳の質の母親は健康を悪化させ、そのためやや気候温和なチエルニコフに移ることを許されたにも関わらず彼女は一八六五年肺結核により三二歳で早世した。一八六七年、アポロは条件付で仮釈放されたが、既に肺結核に侵されており、一八六九年五月クラクフで没した。父親の死後、母方の伯父で弁護士であったタデウス・ポプロウスキがコンラッドを引き受けることになった。彼はコンラッドをクラクフの、次いでスイスの学校に入れたが、コンラッドは学校生活に退屈を覚え、一八七二年十四歳の頃から船乗りになりたいとの意向を示して伯父を驚かすようになった。伯父はこの希望を放棄するよう説得を続けたがコンラッドは耳を貸さず、結局伯父は一八七四年コンラッドが船乗りになるためにフランスに向

わずかな修正を加え、若者が航海士として乗り組んだ初めての航海の異彩ある物語を、短編小説『青春』として一八九八年に刊行している。

旅客用の汽船でロンドンに戻った後、新たな航海の途上一八八四年四月にボンベイでナーシサス号の二等航海士となり、約六か月間勤務した。この船による航海を材料にして彼は後年『ナーシサス号の黒人』を書いた。一八八四年十二月に一等航海士の資格を得、一八八六年には八月にイギリスに帰化を許可され、さらに十一月船長の資格を取得した。

一八八七年二月コンラッドはジャワ島スマランに向かうハイランド・フォレスト号に一等航海士として乗り組んだ。このときの船長が後年彼が小説『台風』の中でその名を後世に伝えたジョン・マックファーである。コンラッドは次いで、東南アジアの諸島を巡って交易を行う汽船ヴィダー号に移つて数回の航海をした。この間、彼はボルネオで小説『オルメイヤーの阿房宮』の主人公のモデルであるオランダ人オルメイヤーに出会っている。

クレイグ船長の下で過ごしたこの船での生活は快適なものだったにもかかわらず、コンラッドはさしたる理由もなく一八八八年一月にシンガポールで下船して

に別の意味におけるシャドウ・ラインが隠されていることも興味深い）は、コンラッドが言うように精神的ショックによる病理的現象として説明可能であろう。超自然的な解釈は作者が伝えようとする真の意味から逸れて、これを弱めてしまうことになり、コンラッドが反論した理由もここにあった。しかし、次の一節が顕著な一例だが、海や風等の自然、現象そのものに意志があるとするような書き方がこの作品には見られる。このことも、コンラッドが反論せざるを得なかったような批評が生じた一因になったのかも知れない。

……得体のしれない潮流が我々の船をあちらこちらに漂わせたのである。その忍びやかな力は、湾の東岸を縁取る島々の眺望が移り変わることで目に明らかだった。吹く風も気まぐれで人を惑わすものだった。希望を与えても結局はそれを打ち砕いて失望の極みに変えてしまい、確かな前進の見込みは実は後退していたという結果に終って、風はため息と共にこときれ、あたりは無言の静寂に閉ざされるのだったが、その中で潮流は各自思いのままの動きを続けていた。その敵意に満ちた振る舞いを。

(80 ページ)

週間船室に監禁されたが、船長はむしろ水夫に非があるとしてジャワ沖でスミスが米国船に逃亡するのを助けた。このことを知った乗組員は暴動を起こし、優秀な船乗りだった船長は精神的苦痛に耐えかね、船から身を投じて自殺した。スミスは二年後にロンドンでの裁判で七年の刑に処せられたのだ。

コンラッドはこの素材に多くの変化を加えており、『秘密の共有者』におけるレガットの立場はスミスに比べればかなり同情すべきものになっている。水夫を死に至らしめたのは、全乗組員の生命にかかわる危機に当たり、彼が船長に代わって船を救った際の偶発的な出来事であり、また、彼は船長の死をもたすことはなかった。それどころか、無能な船長は法律に従って彼を陸上の当局に引き渡すことしか念頭になかったのである。レガットは法の裁きを受けるよりも内心の規範に従って、大地のおもてをさまよう放浪者となる道を選び、独力で船を脱出して泳ぎ続け、たまたま「私」の船にたどり着いたのである。

この作品の、もう一つの素材となっているのはコンラッド自身がオターゴ号で初めて船長を務めた時の体験である。しかし後年書いた『シャドウ・ライン』が

『秘密の共有者』は一九一二年に刊行された短編集『陸と海の間』、『Tixt Land and Sea』中の一編で、一九〇九年十一月半ばに書き始められ、約二週間という異例の早さで完成された。コンラッドは初期の、主として東南アジアの海洋を舞台とする創作を離れ、『ノストローモ』(一九〇四年)、『密偵』(一九〇七年)でそれぞれ南米、ロンドンに視点を移し、当時はロシアを舞台に『西欧の眼の下』を執筆中だったが、マレー群島周辺で交易に従事していた冒険好きのマリス船長という人物から来信及び訪問を受けたことがきっかけとなって、再び船の生活を主題に取り上げ、この作品集に収められた三篇を書いたのである。

語り手である船長の分身的存在として描かれるレガットの人物像は一八八〇年に英国の茶輸送用快速帆船力ティーサーク号で起きた事件に基づいている。この事件は広く報道され、コンラッドに強い印象を与えていた。この船が南アフリカの沖合いを航海中、スミスという一等航海士が自分の指示に無礼な応答をした一人の水夫と口論を起こし、水夫が重い鉄棒を手に立ち向かってきたので、鉄棒を奪い取って人事不省に打ちのめした。水夫は三日後に死亡した。スミスは約一

この時期の事実をほぼ忠実に描いた自伝的作品であるのに対し、『秘密の共有者』で取り入れられているのは、馴染みのない船で指揮を執ることになった、よそ者意識を払拭できない心理状態と、作品の舞台、タイランド湾に関してコンラッドが実際の航海で得た知識のみであると言っても良い。その中でも『コーリン島』は両作品で重要な役割を担っており、特に『秘密の共有者』では最後のクライマックスの背景となっている。

語り手である「私」とレガットの関係について、批評家は文面に表れているよりも深い意味を求めようと欲求に駆られるようで、様々な解釈が行われている。レガットを「私」の潜在意識あるいは抑圧されている自我の一部分の象徴とするものなどである。しかし、これらの説についてここで詳しく述べる余地はない。あえてこのような解釈を行わなくても、『秘密の共有者』はコンラッドの会心の作として、そのままでも十分興味と魅力を具えた好短編である。

二〇〇五年一月

田中勝彦